

『有刺鉄線のシルエット』 - 中野杉本村

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

その先には一体何があるのだろうか？

全てを拒絶するかのごとく立っているコンクリ塀。その上には刺々しい鉄の線が横たわっている。夕暮れが終わろうとする中、荊のシルエットが黒い空に浮かび上がっていた。

僕はその光景を前に呆然と立っていた。

何故僕はこちら側にいるのだろうか？

何故この壁を越えることができないのだろうか？

僕は思うのだ。あの向こう側へ行かなければならないと。理由なんか分からない。でも行かなければならないのだ、絶対に。ただこちらで手をこまねいているだけではいけないのだ。

この向こう側に何があるかは分からない。だが、見過ごすことのできない何かがあるのだというそんな確信があった。

退くことはいつでもできる。けれどそれがいつも正しいとは限らない。

でも、僕には進むことができなかった。

その先に進む勇気が無かったのではない。その壁を越えるには僕はすでに身が重くなりすぎていたのだ。

色々な物でがんじがらめになっている僕には壁を越えるだけの身軽さはもう無い。無茶をすることは、もうできない。

黙って立ち去れば良いのかもしれない。僕にはどうすることもできないのだから。

でも、僕にはそれができなかった。目を背けることなどできなかった。黙って引き下がることのできるほど僕は賢くは無かった。

いくらでも方法はあるのだ。壁が越えられないならば叩き壊せばいい。

言い訳など必要ない。僕は僕のできる最大限を尽くすしかないのだ。

一步を踏み出さなければ何も変わらない。

* * *

自分の世界から現実に帰ってくるまでしばしの時間がかかった。

僕は一枚の写真に目を奪われていた。他の人から見たら、なんら変哲のない、そんな写真。それに心奪われていた。

それはまるで、深い孤独と悲しみをたたえているように見えた。

あるいはそれは自分自身に似ていただけなのかもしれない。

とにかくそれは僕にとってはただの一枚の写真ではなかった。

「有刺鉄線のシルエット」

それがこの写真のタイトルだった。

[戻る](#)

